

メタセコイア

一年前の元旦特集は戦後五十年の節目と二十一世紀を見据えての環境問題や地球温暖化など、世界をみる目線での問題が多く取り上げられていた。ところが阪神大震災、オウム事件、銀行倒産に不況リストラ、就職難など厳しい現実が相次ぎ、今年の特集は戦後の政治や経済の曲がり角論に見事に様変わりしてしまった。わずか一年での激変に戦後を見続けていた 甦った木の化石」メタセコイアはどう見ているのだろう。

日本の古い地層から発見された化石が、巨木の代表であるセコイアの先種としてメタをつけてメタセコイア名付けられたすでに絶滅種と見られていたが、中国の四川省の奥地で生きた化石で発見されのがまさに一九四五年、終戦の年だった。幻の魚シラカンスの陸上版である。そして五年後、湖西省で見つけられたメタセコイアから採取され実から育った苗、百本が日本に送られ、皇居や小石川植物園をはじめ各地に植えられ全国に拡がった。日本名はアケボノスギ。成長は早く樹齢二、三百年ともなると三十歳を超す巨木になる。生きた化石のメタセコイアが甦ったのである。

筆者の勤務している大学の構内にもメタセコイアの大きな木が四本植えられて

いる。樹齢から推して最初の苗か、そう遅くない時期のものだろう。晩秋になると橙がかった黄葉が小枝と一緒に落ちて、まるで酸性雨で枯れたヒマラヤスギの容貌のような奇妙な木である。その巨木群の化石跡がグリーンランドのなかから、まるでつい最近まで生きていたかのような姿で掘り出され、二酸化炭素と気候変動の係りを解く鍵の一つを握っているといわれている。

気象を専門とする大学にとつて、気候変動に翻弄されて、一時は絶滅といわれたメタセコイアの子孫が奇妙な姿で並んでいるのも、先人の深い示唆を感じて興味深い。人類より一桁長い悠久の時間を生き延び、終戦の年に発見され戦後に甦ったメタセコイアの目に日本の繁栄と挫折がどのような姿に写っているのだろうか。

（村松 照男）